

---

# FINALFANTASY零式ー 1 0 の名と 4 人のルシー

n

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FINAL FANTASY 零式ー10の名と4人のルシー

### 【Nコード】

N9465Z

### 【作者名】

n

### 【あらすじ】

Dr・アレシアを母と慕う特別な魔導院の候補生とは違う幻のクラス0。

表舞台には出る事の無かった0組の候補生達は朱雀の窮地を始めとし朱雀の切り札として動かしていくことになるそしてDrアレシアの行う世界の螺旋600104973回目

Dr・アレシアは本来存在しない10を呼び出しクラス0に加えたそしてDrアレシアはルシをも生み出す

世界を正しい方向、本来の今までの600104972回までとは

違った世界にする為にフィニスの時では無く

12人が笑って生きる世界を作り出す為に新たなクラスゼロのメン  
バーとルシの4人を世界に加えて・・・

## プロローグ（前書き）

ええつと！

nです！

失礼ながらFINAL FANTASY零式のファンフィクションを書かせていただきます！

他にも書かれている作者さん多いとおもいますがその人以上に頑張っていきますのでよろしく願いします！

優しい魔王の疲れる日々もよろしくおねがいします！

## ブローグ

「マザー・・・？」

背が高い気弱そうな青年が眼鏡をかけた女性に名を呼びかける

「あら？起こしてしまったかしら？」

「私は結局考えてみたのよ・・・

これで最後の螺旋にしたいと私は思っているわ。  
だから私は貴方を起こしたのよ」

「そつか・・・

僕はマザーの言うことなら何でも聞くよ・・・  
やっと会いたかったみんなに会えるんだから・・・」

「そうね。

でも貴方はここでの記憶を少しだけカットさせて貰うわ、  
今から貴方を朱雀に送るここにいる12人と一緒に、  
それまで・・・おやすみなさい」

「マザー・・・おやすみなさい」

「ここで歴史をかえる・・・

長年生きているとすこしおらしくもなるものね・・・」

「————貴方は人の死を忘れられない————

「————貴方は12とは少し違う————

――貴方は繋げるの12人の生きる未来を――

――貴方には期待してるわ――

――10の名を持つ者――

## プロローグ（後書き）

ファンフィクション！

初めてのファンフィクションです！

応援していただけたら嬉しいです！

優しい魔王の疲れる日々も頑張って書いていきますのでよろしくお  
願いします！

## 開戦、運命の3時間 1（前書き）

ファンフィクション初めてということですからこしへたくそかもしれない  
せんし再現しきれない所とこともあるかもしれないが頑張っ  
て書いていきますのでよろしくお願いします！



## 開戦、運命の3時間 1

「彼らは自らの運命を」

「自分たちで決めた」

「そう、死ぬことを恐れずに」

「死に直面する恐怖を知らずに」

午前十時五十一分

血まみれの死体がそこらじゅうに広がっている

その道をふらつきながら歩く男がいた男はふらつきながらも前にただ前に歩いていた・・・

「ポイントは・・・まだ・・・先か・・・」

男はしばらく歩くと建物の影に隠れた同じような風貌の兵達を曲がり道で見つけた

「みんな、大丈夫か？」

ふらふらとその場に倒れる男、剣を降ろし男は隠れていた兵達に質問をする

「朱いマントの・・・若い兵を見なかったか・・・？」

「見てない・・・」

隣に壁を背にし座っていた女の兵隊が彼の質問に答えた

「アンタは・・・？」

まだ立ちながらはなせる兵士に女の兵は見ていないかと質問した

「俺は・・・」

その時空から赤い炎の塊のような物が飛んできて彼らの真ん中で破裂した

あまりの風圧に吹き飛ばされる兵士達、男も持っていた剣と一緒に吹き飛んでしまう

「いたぞ！」

虎のような面を被った男が現れた

「殺せ」

男達は重火器を持っており

1人は女の兵の胸部辺りを深く重火器についでいた刃でその女兵士を一刺しで殺す

もう1人は破裂した火の玉が当たりとても救える状態じゃない

男は立て膝に手をつき、その場から逃げだそうとした

それを2人の兵が見逃す訳もなく男の片足を撃ち男は倒れた

男も男で今度は相手を怯えきった目で見つめながら後ずさりしていく  
兵が男を攻撃しようとしたとき  
鳥の鳴き声が響いた

「なんだ？」

男はそういつとその男の脇腹を大きなヒヨコの様な生物がタツクル  
した

ヒヨコは1人を蹴散らすともう1人の兵に向かって鳴き声を発した  
怯えた兵を見た男は落とした剣を手の平で探り掴み

「うわぁー！」

声にならない様な叫びをあげながら兵士の胸に剣を突き刺したこれ  
でもかと思わんばかりに

一刺し・・・血しぶきがあがり兵士は死んだ

男は敵兵に剣を刺したまま疲れ切った表情を見せそこで仰向けに倒  
れ込んだ

そらは曇っていてなにが起こっているのか分からないいつも晴れて  
いる空は煙でまったく見えなくなっていた。

するとヒヨコの様な生物が男に近寄る

男はその生物の顎を撫でた

「チチリ・・・」

生物の名らしきものを呟く

しかしその生物の首から血がポタリと落ちた

生物の首には傷があり男はそれに気づくと立ち上がりフラフラしな  
がらも生物の状態を確認する

「よし・・・まだだ・・・エースにこれを・・・」

男はそう呟くとチチリと呼ばれる生物に乗りその場を後にした

いつもは清楚かつ綺麗な街並が壊され、

廃墟にでも来たかの様な町並みになっている。

黒煙がチチリに乗った男を襲う、しばらく行ったところ門が見えた  
近く・・・

「目が・・・」

そう言つて門を通りすぎた時、男はチチリから落下した。

顔を打ち血まみれになつた男に落下してしまつた主人の元へチチリ  
は寄つた

男はチチリが寄つてきた事に気づくとある事をふと思い出し口に出す

「あいつは・・・エースは・・・？」

燃えさかる火に囲まれながら男はまたそこに仰向けに倒れ込んだ

午前十一時三十七分

銃声が響きチチリの鳴き声上がった

倒れ込むチチリその倒れ込んだ音に男は気づきハツとする

「チチリ・・・！」

男は倒れ込んでしまったチチリの近くに行き名を呼ぶ

「チチリ！」

男は左手から緑の気のようなものをだし魔法でチチリの治療を試みるが・・・

魔法はかからない

「くっそ・・・」

男は後ろに居る兵に気づきながらも人の名を呼んだ

「エース・・・」

地面を殴りつける男に先ほどの兵と同じ格好をした三人の兵が近付いてくる

「エース」

男達が最後の一步となる全身をした時、

「エースーーーーー！！」

男は叫び声をあげた

すると彼の前から巨大な炎の塊が後ろの3人の兵を吹き飛ばした男は目をこらしそこに居た人を見る

そこには・・・

「ここだ！僕はここだ！」

少し長い金色の髪を靡かせ青い瞳をした少年が返事を返す男はその者を待っていた者と気づくとその場に倒れ込んだ激しく燃える背後の火を前に見て男はチチリに寄り添いチチリの羽ねを枕にしながら右手を振り上げ落とそうとする・・・

するとその手をエースと呼ばれた少年が両手で優しく掴んだ

「イザナ・・・」

少年はその男の傷の回復を試みるしかし・・・  
何らかの影響によって治療は行えなかった。

その少年の隣を門の向こう側から遅れて来た眼鏡をかけた少女が男をみながら

「もう、無理ですね」

と言いその場から離れた

「分かってる・・・」

少年ももうこの男は助からないと見るとその場を立ち去り眼鏡をかけた少女の後を思い足取りで追った  
イザナはその少年お後ろ姿を見つめ

「き・・・来てくれて・・・」

ありがとうな・・・

チチリ・・・少し・・・休もう・・・」

男はチチリを撫でると笑みを浮かべ

「おまえの名前・・・やっぱり・・・変だよ  
マキナの名付けは・・・わかんないな・・・」

男はそう言うところで倒れ込み目を閉じた

立ち去った二人の前に先ほどの兵士が7人立ちふさがった  
するとその男達の前に鋭い眼光を敵に向け髪は針の様に尖った感じ  
のする少年が立ちはだかった

少年は手を肩から少し離れた所に置くと  
槍がどこからか現れ少年の手に持たされた

「へッ・・・」

笑いながら敵兵士を見下し少し微笑む

少年は1人ずつ兵士をその槍で突き刺し1人、また1人と殺した

午前十一時三十九分

イザナはチチリにもたれながらチチリに呟いた

「俺もお前も・・・死ぬのかな・・・」

マキナ・・・元気だな・・・

レム・・・もう一度・・・会いたいな・・・っ・・・

チチリ・・・お前が一緒に良かった・・・」

男は少し叫きながら過去の事を振り返る・・・

その男を見つめる眼鏡の少女とエースその視線は温かいものではなかった・・・

「イヤだ・・・！」

怖い・・・イヤだ・・・死にたくない・・・！」

男は呻き声を上げながら泣き出すその瞳からは涙が零れていた  
チチリも呻き声をあげる

それを見たエースはただただ・・・唇を噛むしかなかった・・・

午前十一時四十一分

鋭い眼光の少年は兵士を片付け眼鏡の少女とエースと合流した

「行つてきなさい・・・」

眼鏡の少女がそういうとエースは死した兵士の場所へ向かった  
一歩ずつ一歩ずつ・・・死した兵士に近付くもう名は覚えていない・  
・

この兵士とどんな関係だったのかももう・・・記憶にはない・・・  
エースは悲しみの表情を浮かべ倒れ込んだ黄色い鳥の目の先を撫でた  
男の手を優しく手にとり男の胸のまえに手をやった・・・



男は血まみれのまま・・・眠っている  
エースの瞳からは一粒の涙が零れていた

同時刻 午前十一時四十一分

「また・・・1人・・・死んだか・・・  
人が死んでいく・・・僕は・・・」

1人佇む銀髪の少年、  
人々の死を悔やみ顔がひきつる・・・  
同じ軍の仲間・・・  
自分の国の人  
敵兵を許さずにはいられなかった

「「テン！聞こえているか？」」

彼の胸ポケットに入っていた死した兵士から貰った通信機から女性  
らしき声が鳴り響いた

「セブン・・・？  
どうしたんっすか・・・？」

「「お前に任せる事になってしまつてすまないな・・・  
他に適任が居なくなてな・・・」」

「全然いいすよ！？」

それじゃあ僕は作戦を開始するっス・・・！」

銀髪の少年は通信機を再び胸ポケットにしまつと武器らしき大剣を担ぎ、

戦場に向かった

## 開戦、運命の3時間 1（後書き）

第一話イザナが死ぬ所を書いてみました！

2話は多分テンが活躍すると思います！

感想等もお願いするっスゝ・・・

## 開戦、運命の3時間 2（前書き）

死した兵士から通信機を貰い  
朱いマントを身に纏った候補生達  
テンは敵の戦艦を叩きに行く

## 開戦、運命の3時間 2

鷗歴 842年 水の月12日

「ペリシティウム白虎」を有する「ミリテス皇国」は、隣国である「朱雀領ルブルム」への侵攻を開始する。

宣戦布告と同時に国境付近へ集結していた皇国軍はルブルム各地に進軍を開始。

同時刻、別動隊による「ペリシティウム朱雀」への奇襲を敢行。

その部隊にはルシが含まれていた。

ルシを用いた国土侵略行為。

これは、オリエンス四ヶ国が定めた「パクスコーデックス」に対する重大な規約違反であった。

「魔導アーマー」を主戦力とする皇国軍に対し、ペリシティウム朱雀は、魔法を以てこれに応戦。

その魔法によって呼び出される「召喚獣」の圧倒的な力は、戦艦をも凌駕し、皇国軍の奇襲は失敗するかに見えた。

しかし、白虎ルシであるクンミ率いる特殊部隊が朱雀の攻撃をかくぐり、

新兵器「クリスタルジャマー」を発動。

「朱雀クリスタル」の完全な無効化に成功する。

魔力の源を絶たれた朱雀軍は、戦力の大半を失いなすすべもなく制圧されていた。

皇国元帥「シド・オールスタイン」は

朱雀174代院長「カリヤ・シバル6世」に対し、

朱雀全軍の武装解除および朱雀クリスタルの引き渡しを要求。

朱雀に与えられた猶予は6時間。

要求がのまれない場合、皇国軍の殲滅作戦による朱雀への肅清が行われる。

魔導院陥落の危機対し、カリヤ院長が下した決断は幻といわれた朱雀候補生「0組」を主とした魔導院解放作戦であった。

――――魔法院前――――

朱雀領ルブルム代表するかであろう魔導院の前に銀髪の少年は居た。本来ならば候補生達が日々の物事を語り合ったり放課後の相談をしたりする筈の魔導院前、そこには皇国軍の兵により建物は倒壊され天然芝は燃やされ燃える火や油、鉄の異臭人の声など聞こえないもはやここは朱雀の魔法院の前ではないように思えた

「これが人のやる事か・・・？」

大剣を携えた銀髪の少年が1人その場に立ちつくしていた  
少年の怒りはもう隠しきれぬ所まで燃え上がっていた  
それはまるで火の燃えさかる如く・・・

「貴様は！朱雀の兵か！」

皇国兵を目で認識する

1人しか居ない皇国兵は通信機を使い仲間を呼び寄せた

「さて・・・

どう殺してやろうかあ・・・」

舌をなめずりながら敵の皇国兵は銀髪の少年に銃を向けながら近付く  
銀髪の少年は胸ポケットから先ほど通信のきたセブンに通信を送る

「「テン？どうかしたか？」」

「少し・・・時間がかかるかもしれないっス・・・

絶対戦艦は落とすっスから・・・信用してほしいっス・・・」

銀髪の少年は怒りをあらわにしないように交信を続ける

「「分かった。」

何があつたかは知らんがお前の言うことを信じよう、  
ただし予定時刻はすぎるなよ？」」

「・・・わかつたっス・・・」

銀髪の少年はセブンとの交信を切ると目の色をまるで話をしていた  
温厚な人間とは思えない様な別人の様な目付きに変わるそれは圧倒

的にはち切れんばかりの憤怒からであつた

「なっ・・・なんだよ！」

やれるもんならっ・・・！」

「黙れ・・・」

男が口を開き話し出した途端銀髪の少年は男の腹を片手で突き破つた。

その場では血がはじけ飛び男は声も出せぬまま腹を突き破られ死んだ

「君らが何をしてたか教えてあげるよ・・・

さあ・・・こいよ・・・皇国の方々は偉いんだろ・・・？」

人を殺すんだろ・・・？」

クリスタルが欲しいんだろ・・・？」

だったら俺を殺して奪ってみせるよ・・・？」

後・・・俺を怒らせたのはお前等だからな・・・？」

覚悟はできてんだろうなあ・・・？」

皇国の皆様がたあっ！」

————朱雀の街————

「テンには苦勞をかけてしまふな・・・」

テンとの交信を終えたセブンは自分の武器である鞭剣を手にしセブンは通信機を切る。

銀髪の綺麗な髪、目を見張るほどの顔の整い彼女は戦闘する者とは



思えない物腰だった

「セブナー？通信終わったー？」

赤髪のようなが少し桃色の様な髪色をした小柄な少女が交信の終わったセブンに話しかけた

桃色髪の少女は小柄ながらも勇敢な少年の様な目をしている

「ああ、一応な・・・また後で連絡はするつもりだ。  
テンは多分敵兵と交戦状態だろう。」

交信しながら聞こえた足跡がいくらかあった。

少なくとも10人以上は居るそれに鋼機と呼ばれる皇国の兵器の稼動音も通信機越しに耳にした。

本当はテンを助けに行きたいのだがセブンには別の任務がありその場には向かえない

それに彼の志願で彼は戦艦を落とす作戦についたのだから誰も文句は言えない。

セブン以外の面々も一度は反対したしかしマザーがその任をテンに任せる事を押し彼1人ペリシティウム白虎の戦艦を墜とすまたは消失、爆散を任せた

「まあ・・・確かにテンじゃ心配かもね  
ナインやキングならまだ頑張ってるって言えるけどさ」

桃色髪の少女がテンの事を気遣いながら天を見上げたため息をつく、

「ケイト・・・」

これはマザーが決めた事だ

私たちはマザーの命令だからな・・・」

セブンも下に俯きテンの顔を頭に浮かべ心なしか落ち着いていない心配そうな表情を浮かべるセブンにケイトは落ち着かせようとテンの事について話し出す

「でもさ？」

私はテンだと違うことを心配してやうんだよねー・・・」

ケイトの証言に疑問を持ちつつ頭上に？を浮かべるセブン

「だってさー

多分、私らの中だと普段はすごい弱そうな奴だけど、戦闘訓練とかになると目の色変わるよ？

ずっと前にやったー・・・ええつと・・・

そうそう！ベヒーモス討伐の時！

デュースが怪我しちゃった時に

テンがブチギレちゃった時、威圧感だけで追い払ったじゃんだから人間なんかじゃ逆に危ないんじゃない？

テンは怒ると何するか分からないしさ

ね！デュース」

「テンさんは皆さんに優しいですから・・・

私たちにもだから・・・暴れすぎたら私がとめますっ！」

もう1人休んでいたデュースと呼ばれる茶髪の髪が綺麗にまとめられた少女が立ち上がりテンの事を褒め危険性を伝えてみる。

「確かに・・・

あいつは此処に来るのも楽しみにしていたしな・・・  
資料を見てシンクと騒いでたしな・・・

それにデューズとケイトの言うとおりだな・・・！  
私たちもそろそろ行こう！」

セブンは立ち上がるとデューズとケイトを連れ次なる場へと駆けていった

――魔導院前――

「やつやめてくれえ！  
たっ！助けてくれえ！たのむっ！なんでもする！朱雀の捕虜にでもなんでもなるからっ！」

怯えきつている兵士、

仮面を付けていてもその恐怖感仮面の中から溢れだしてきている

「今更か・・・？」

100人全員が降参でも土下座でもしてくれたら許したかもしれねえなあ・・・

でも都合が良すぎな気がするのは俺だけかな？

仲間が殺されるに殺されて最後に自分が残って命ごいか・・・？

君も朱雀の人を殺してきたんだろう・・・？

楽しかったか・・・？

嬉しかったか・・・？

他人を殺すのは喜んで自分が死ぬのは悲痛の叫びをあげるのか・・・？

俺も死にたくはない・・・

ただとお前は死ね、お前も死ねと思い人を殺すんだな・・・  
でも最後は俺が殺して天国にでも送ってやるよ・・・

そのかわり・・・ここで死んでくれ・・・  
俺は貴方を覚えているから・・・  
だから・・・最後は僕に十字架を背負わせてほしいっス・・・」

男は銀髪の少年の話を聞くと少しいままでの事にでも疲れたのだろうか安堵の表情を浮かべた  
男は恐怖を振り払い

「だったら・・・  
殺してくれ・・・もう疲れた・・・  
私は疲れたよ・・・  
最後に君のような人に殺されるのなら私の人生に華があったとも  
思いたいね・・・」

男はそう言うと言った銀髪の少年が持っていた懐刀を自分の腹に突き刺し  
血を流し、  
まるで殺された人間ではないような顔をして眠った。

「さて・・・  
そろそろ墜とすっス・・・  
その前に！」

銀髪の少年は自らが殺した白虎兵の死体、魔導アーマー、鋼機の残骸の山に向かい一礼し祈りのようなものを手で現し捧げ掌を死体の山に向け一気に握ると緑、赤、青、白、紫、といった発光するまるで火の玉の様な物体を掌に納めた

この火の玉の様な物体はオリエンス全域に存在する生物の魂で「ファントマ」といわれるこのファントマを先ほどの様な事を執り行いとある場所へ送るこの様なことが出来るのはクラス0の者達のみ

「こんなに殺したのか・・・  
誰一人として忘れないっスからね・・・  
そろそろ・・・墜とさないとみんなも困るし撃墜任務を始めるっス  
よー！」

意気込むテンが右手を振り上げると右ポケットに入れていた通信機  
がなり始めた

「「テン！大丈夫か！？」」

相手はセブンだった心配していたのかも凄く大きな声になってい  
る彼女は滅多に叫んだりする事はないのだがこの時のみはさすがに  
自分の中のテンへの心配が有頂天になったのだらう

「大丈夫っスよ・・・」

セブンさんに心配してもらるのが嬉しいっス・・・

今晚は祝勝会にするっスよー！

ジャンジャン料理するッス！さあー！戦艦墜とすっスよー！

じゃあセブンさん次は撃墜報告するっスー！」

テンの態度がいつもの態度に戻り内心ホッとするセブンしかしまだ  
戦いは終わっていない

その場に居たデューズとケイトは交信内容を聞くと表情に笑顔が表  
れた

その交信の5分後

「一艦撃墜っスー！」

エース達のは2番艦っスね・・・

それ以外は墜とすっスよー！」



開戦、運命の3時間 2（後書き）

第二話です

少しテンの出番を増やしてみました！

開戦、運命の3時間 3（前書き）

開戦から3時間、

テンは着々と敵艦を撃墜していく

テンは魔導院上空で九つの尾を持つ狐をはるか地に見る



### 開戦、運命の3時間 3

交信から五分後

空から魔導院付近に鉄の塊が大量に降り注いだ

――朱雀の街北側――

「テンかなあ」

派手にやってるね」

金色の髪にオールバックの髪型をしたのんびりとした少年が声をあげた。

「派手だねえ」

ジャックもあれぐらいできる」？」

茶色の髪のおさげ髪の少女が自分の武器らしきメイス地に付け杖のようにして支えて立っている

「わかんないよ」

僕は刀だし、テンはシンクのメイスより大きくて重い大剣だよ、多分無理かなあ」

ジャックと呼ばれる金髪の少年は少しのんびりして口調をしているそれに対しシンクと呼ばれる少女も同じような物腰と話し方だった

その話方とやりとりに少しだけイライラする男が一人、

「お二人ともまだ戦いは終わってはいませんか？」

それにまだ祝勝には早いですし我々にはまだ任務が残っていますしそれよりも早く魔導院全域にかけられてしまっている皇国軍の開発したジャマーというクリスタルの力を向こうかしてしまうおぞましい兵器を破壊しなければなりません。」

金色の髪にこちらは少し長めで髪の毛が目にかかってしまっている少年は耳にタコができるほどシンクとジャックに注意を促したその長期的確な注意をした少年に対しシンクはふてくされながら

「トレイ！ そんなことは私とジャックもわかってるよ」

デュースの方がやりやすいよね」ジャック」

「そうだね」トレイの注意とか説明はほとんど嫌味聞かされてるよ  
うなもんだからね」

目の前にいるトレイに対して少し不満を持つ二人

トレイは二人の発言をまるで聞いていなかったように話を再び始めた

「それにまだエース達が来ていませんジャマーの解除まではまだ時間がかかっているのでしょうか・・・このままでは我々に疲労が回ってきますよ・・・」

時間まで後5分」

「私は大丈夫だよ」？

シンクちゃんはまだまだいけるよ」！

頑張っちゃうよあ」！

「僕も全然余裕だよ〜？  
トレイはもう疲れたの〜？」

ニヤニヤした顔をトレイに向けるシンクとジャックそれに対しトレイは一度咳ばらいをすると  
手を口の近くに添え考え始めました。

トレイは瞬時に考えがまとめると

「その前に付近の敵を片付けるのを優先させましょう  
エース達とテンの心配はそれからです  
では行きましょう」

トレイは自分の武器である弓を召喚すると付近の敵を殲滅しにシンクとジャックを誘導した

————朱雀の街南側————

「あ〜！！」

「ただだけ沸いて出てきやがんだこいつらは！  
ただだけ殺してもきりがないぞ！？」

銀髪の少女がまるで狂戦士のごとく吠えている。

こちらの銀髪の少女はセブンとは違いかなり気性が荒く冷静さをなかなか保てないタイプだろう

それをいわせるのが彼女の無作為に束ねられた後ろ髪だろう

「サイス・・・」

少し静かにしろそうすれば心も落ち着くし敵も確実に倒せる・・・」

「キングの言うとおりかもしれないな

サイスは雑な所があるからな・・・

それにサイスが吠えることによって人の視線がこちらに向けられることもある」

「キングの言うことはあつてるんだけど・・・

エイト！誰が雑だつて！？」

サイスの吠える声を聞いて注意を促した金髪で長身の男性はキング、あまりにもその風貌からは少年には見えないであろう目つきと体格のよさがある

自分の武器である二丁拳銃も今は敵が居ないためしまわれている。

キングの隣でサイスの曰ごろのことでの注意のようなものを促した短い茶髪の小柄な少年はエイト小柄な割りに攻撃への一撃には余念がなく敵には他のクラス0の面々とは違い格闘という一人斬新な武器なのである。

「サイスが吠えるからまた敵が出てきたな・・・」

「サイス・・・次は吠えるな面倒なことになる・・・」

「うるっせえな！わかったよ！もうほえねえから！つかほえた覚えなんてねえ！」

————魔導院上空・皇国軍2軍艦————

「魔晶石は設置した急いで出るぞ」

「ここって・・・どう降りるんだコラア！」

「それを知りませんでした・・・  
私も知りません・・・」

「多分なんとかなる。  
とにかく出口を目指して進もう」

脱出口はどこにあるか入ってきたところから元の場合へと戻るエース、  
ナイン、クイーン、  
しかしその3人の脱出を4〜5人の兵士と一機の鋼機が道を阻む  
しかし三人にはそれほどとはめることはできない

エースは武器であるカードを投げ、  
ナインは敵に一定の距離に近づくと敵をその槍で串刺しにし  
クイーンは敵兵が気づけぬ速度でレイピアを敵兵に刺しこんでいく  
順調に鋼機以外の敵を処理し終えた3人トドメを刺そうとしたその時  
戦艦の甲板を突き破って鋼機ごと3人の前を何かが消し去った  
見覚えのある銀色の髪、そしてクラス0の内もつとも重く長い武器  
の大剣を扱う男が3人の目の前に現れた。

「いたっス・・・  
2番艦だけ残しておいたっスから早く脱出するっス！」

テンはそういうと3人を大剣の能力を使い地面に大剣を突き刺しそ  
こに3人とともに瞬間移動し着陸した。

「終わったのか？」

「終わったスよ？」

1 / 3 / 4 / 5 / 6 番艦まできちんと落としたっスから！」

自信満々に自分の功績を3人に報告するテンしかしナインだけは納得していなかった

「んじゃその証拠をみせてみるコラァ！」

証拠を見せると鋭い眼光でテンを睨み付けるナインするとテンはズボンのポケットから皇国軍からの戦利品の形態食料が大量にあふれ出てきた

「すごいですね・・・」

ほんとにテンが偉業を達するなんて・・・」

驚きの表情を隠せないクイーンそれほどにまでテンのやってのけた任務は困難かつ敵の量も尋常じゃなかったのである。

「ジャマーをひとつ取り除いたことにより一定のエリアで魔法が使えるようになったっス

それとみんなが闘技場で戦ってるっスから先に行つてほしいっスみんなの話によると2人の候補生を保護したらしいっス！」

「わかった！テンも後できてくれ」

そついうとエース達は闘技場の方角へ走っていった。

「さてと僕は残党処理か・・・」

うゝ・・・疲れそうだ・・・」

テンはその日の任務の過酷さ愚痴をはき始めた  
すると通信機に連絡が入った

「はい？テンっスよ？もしもっし？」

「私よ。テン任務達成ご苦労様」

「マザーに褒められるにが一番うれしいっス」

テンの通信機に交信してきたのはDrアレシアだった

アレシアは自分の子主の様にクラス0のメンバーを愛している

特に今回の作戦はあまりの事がなければクラス0のメンバーは生命  
の指輪の力で死ぬことはない

しかしアレシアは個人的な任務や何をすればよいかを伝えることも  
あるその他には労を労う事もある

特にテンはアレシアの中では一目置いているほうだ愛情は同じよう  
にアレシアは注いでいるが個人の能力などで戦力差が出てしまう場  
合などにはテンを起用したりしている

「今のところこの連絡はテンにしかしていないは後にあの子達に  
も伝えることになるのでけれどね」

「なんスか？」

「今日は12日だったかしら？」

14日には魔導院にあなたたちはお引越しょ」

「二日後っスか？それはまた急っスね・・・ども二日も休みなんス  
か？」

何か忙しい用事とかでもあるんすか？」

「軍令部のお偉い人たちがあなた達の存在、というつか活躍を快く思っていない人たちが居てね文句やどこから来たとかいちゃもんばかりつけてくるのよ」

「マザーも大変っスね・・・」

帰ってきたら肩たたきとかでもしてあげるっスあと暖かいご飯を作ってまってるっス」

「あら、じゃあ久しぶりに頼もつかしら？」

あと14日にはあなた達の生活する場が魔導院になるから、まあ私もあなた達の所に時折顔を出しに行くわ、それと荷物をまとめること」

「了解したっス。じゃあ僕はみんなのところに行ってくるっス」

そついうとテンはマザーとの交信をきり魔導院の闘技場へ向かった



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9465z/>

---

FINALFANTASY零式－10の名と4人のルシー

2011年12月30日23時50分発行